一

次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の——線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

- 1 海のきれいな小さなギョソンを訪れる。
- 2 町のジドウ館で夏祭りが行われる。
- 3 学校の玄関には二宮金次郎のドウゾウがある。
- 4 飛行機のソウジユウ席を見学する。
- 5 資料のプリントを大量に束ねる。
- 6 音楽会でピアノを演奏する。
- 7 横暴なふるまいを注意される。
- 8 自然の中で清らかな気分になる。

問二 あとのA～Eに当てはまる漢字一文字を答えなさい。なお、同じアルファベットには同じ漢字が当てはまります。

仮 A

直 A

B A

縁 B

向かい B

単 C

C 立

C り D

D 葉

D 語 E 断

一本 E

歩 E

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「スイカの種を誤って飲み込んでしまうと、お腹の中で芽が生える」

こんな噂うわさをよく耳にする。はたしてこの噂は本当だろうか。植物の種子の発芽に必要なのは水分、温度、酸素の三つの要素である。胃の中には十分な水分があるし、温度も高い。酸素だってあるだろう。まさか、本当にお腹の中で芽が出てしまうのだろうか。

もちろん、スイカの種を飲み込んだからといって、お腹の中で芽が出るようなことはないので心配はいらない。胃液の主成分は塩酸で、胃の中はかなりの強酸性の状態である。胃の中は、あらゆるものを溶とかしてしまう溶鉱炉※1 溶鉱炉のような場所なのだ。とても芽を出すところではない。生存することさえ難しいだろう。

ところがスイカの種は芽を出さないまでも、胃の中でも消化されることなく生き残る。スイカの種子は固く丈夫じょうぶなガラス質で覆おわれているので、強大な消化力を持つ胃でも消化されないのである。そしてスイカの種子は、胃の中を無事に通り抜けるのである。

「誤って飲み込んだスイカの種が引っかかって虫垂炎えんになる」という噂もある。この噂はどうだろう。胃の中で芽を出さないにしても、細長いスイカの種が複雑に曲がりくねった腸を通り抜けるのだろうか。盲腸もうちように引っかかって芽を出すことはないのだろうか。

もちろん、この噂もメイシン①である。スイカの種子を飲み込んでしまっても、まったく心配することはない。複雑な腸も難なく通り抜け、スイカの種子はあなたのうんちといっしょに必ずや体外への脱出だっしゅつを果たすことだろう。

人間にとっては、誤ってたまたま飲み込んでしまったのかもしれないが、スイカの種にとっては人間のお腹に入ることは想定Bの範囲はんい内なのである。

なるほど、スイカの種子は誤って食べられる危険までも想定して、身を守る能力を身につけているのだ、と納得②してしまうのは早い。実は、むしろ食べられてしまうことこそが、スイカの本当の狙いねらなのである。

スイカはたっぷりの水分とあの甘みあまが自慢じまんだ。夏の日差しに乾いた体への水分補給や疲れた体への糖分補給にはもってこいである。

スイカの原産地はアフリカの砂漠地帯さばくである。アフリカでは現在でも、貴重な水分の補給源としてスイカを大切にしているという。砂漠に住む人々にとってスイカは水がめの役割を果たしているのだ。

砂漠のような厳しい環境条件の中で、スイカが苦勞をして水分たっぷりの甘い果実を実らせるにはわけがある。実は鳥や動物に食べてもおおうとしているのである。

飢えた虎にわが身を与えたという釈迦ながら、砂漠で果実を与えるとはなんといい慈しみの心だろう。現代で言えば、お腹のすいた人自らの顔を食べさせるアンパンマンのようなヒーローなのだろうか。

もちろん、スイカがなんの見返りもなく、果実を食べさせているはずはない。甘く熟れたスイカにはあるくらみがあるのだ。スイカの果実をむさばり食べた動物や鳥は、スイカの種子もいっしょに飲み込んでしまう。これこそスイカのもくろみなのだ。そして、スイカはお腹の中を通り抜け、糞といっしょに体外へ出るのである。

植物は動物のように自由に動けないが、行動範囲を広げるチャンスが一つだけある。それが種子である。タンポポの種子は綿毛で風に乗って遠くへ飛んでいくし、オナモミの種子はとげとげた実で衣服に引っかかって遠くへ運ばれていく。スイカの種子が好んで鳥や動物の体内に入りたがる理由も、まさにここにある。スイカの種子は食べられて、動物や鳥にあらこちらへ運ばれる。だから、スイカの種子は食べられなければならないのだ。

I

まんまと食べてもらったスイカの種が、胃の中で芽を出したり、盲腸に引っかかるようなヘマをするはずはない。

II

スイカの種子はできるだけゆっくり時間をかけて胃腸を通り、体内にとどまるようにしているという。

III

少しでも遠くまで運ば

IV

スイカ独特の縞模様も鳥や動物に見つかりやすいように発達したと言われている。そこまでも、スイカは食べてもらいたいと思っていたのである。そう考えると、種を食べずにキョウウに吐き出してしまいう人間は、ずいぶん迷惑な存在だ。

スイカだけでなく、多くの植物が鳥や動物に食べられて種子を運ぶという作戦を選んでいる。食べられるような果実をつける植物は、ほとんどが果実といっしょに種子を食べさせて、種子を遠くへ運んでもらおうとしているのだ。

例えばリンゴやモモ、カキ、

X

ブドウなど木の上で熟した果実は赤色、橙色、桃色、紫色のように赤系統の色彩をしているこ

とが多い。これは鳥が赤色をもっとも認識するからである。一方、熟していない果実は緑色をしていて苦い。種子が未熟なうちに食べられては困るので、苦味物質を蓄えて果実を守っているのである。種子が熟してくると、果実は苦味物質を消去し、糖分を蓄え甘くおいしくなる。

そして、果実の色を緑色から赤色に変えて食べ頃のサインを出すのである。「緑色は食べるな」「赤色は食べてほしい」。これが、植物が鳥や動物と交わした色のサインである。

森の果実を食べていた猿の子孫である人間にとっても、赤色は果実と交わした約束の色である。赤色を見ると人は副交感神経が刺激され、胃腸の働きが活発になる。

た果実さながらに闇夜に灯る赤提灯に、私たちがふらりと吸い寄せられてしまうのも、無理もない話なのだ。

(稲垣栄洋『身近な植物の賢い生きかた』)

- ※1 溶鉱炉：鉄、銅、鉛などの製錬に用いる縦型の高い炉。炉の上部より原料を入れ、下部の羽口から熱風を吹き込み燃焼させる。
- ※2 赤提灯：大衆向けの居酒屋のこと。そういった店が店先に赤い提灯をだしていたことから言う。

問五 ——— 線部C「スイカの種子が好んで鳥や動物の体内に入りたがる理由」とありますが、その答えとなる次の一文の空欄に当てはまる語句を本文中より二十七字でぬき出して答えなさい。(句読点も字数に数えます)

スイカは から。

問六(1) 空欄 に入る語句として最も適切なものを次から一つ選んで記号で答えなさい。

- ア イチゴ
- イ キウイ
- ウ メロン
- エ ミカン

(2) 空欄 に入る語句として最も適切なもの次から選んで記号で答えなさい。

- ア ハンバーガーや牛丼のファストフード店
- イ 24時間営業のコンビニエンスストア
- ウ コーヒーや炭酸飲料などの缶入りの飲料
- エ パトカーや救急車

問七 — 線部D「私たちがふらりと吸い寄せられてしまうのも、無理もない話なのだ」とありますが、これは「赤提灯を出している居酒屋について立ち寄ってしまうのもしかたがない」という意味です。筆者がこのように言っているのは赤色がどのような色だからだといのか。果実と人間それぞれにとって赤色はどのような色だといっているか、解答欄らんにあうように(1)には果実にとって、(2)には人間にとっての赤色について説明しなさい。ただし、解答には次の語句を必ず使いなさい。

(1) 果実にとって

苦味物質 ・ 糖分

(2) 人間にとって

胃腸 ・ 食欲

問八 本文中の「**さえ**」と同じ用法の「さえ」を使って短文を作りなさい。ただし、解答には主語と述語を必ず使いなさい。また、本文の語句や文を利用しただけの解答は不正解とします。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

からからから。

坂道を下りてくる自転車の音がします。

しんちゃんの自転車です。

からからからから。さびたチェーンを油の足りないペダルがまわす音。

なにしろ、いまから三十年も前のことですから、自転車はみな重くてごつごつして、子どもたちが使うものは、たいてい誰かのお古で、きつとどこかがこわれているのです。

私はふとんの中で耳をすまして、その風ぐるまみたいな音を聞いていました。しんちゃんが涙目になりながら、歯をくいしばっている様子が に浮かぶようです。

当時、私の住んでいた家の脇道は、長い長い急坂で、自転車に乗りはじめた子どもたちからは「ちびり坂」という名で恐れられていました。五年生にもちびった子がいるという噂まであるのに、しんちゃんは意地っぱりだから、三年生なのに、いつもブレーキをかけずに下りてくるのです。

きいいいいっつ。

坂の下でブレーキの音がします。私はふとんの端をぎゅっつかみました。それまでは、てっきり空耳だと思っていたから。だって、ついさっき、柱時計が十一回鳴ったのを確かに聞いたのです。 すぎ。八歳だった私には、とんでもない真夜中です。

まさか、しんちゃんのはずがない。

でも、そのまさかでした。

こっん。

窓を叩く小さな音が、真夜中のしんしんとした静けさの中にこだましました。

いつもの合図です。

A 私はふとんの中で両方の耳を引っぱりました。寝ほけているのではないかと思って。

あ、痛い。夢ではありません。

そつとふとんを抜^ぬけだして、窓^{まど}辺に近寄りました。しんちゃんが玄関^{げん}から私^{わたし}を誘^{さそ}いに来たためしは一度もありません。母^{はは}がいい顔をしないことがわかっていたからです。私^{わたし}を遊^{あそ}びに誘^{さそ}う時は、いつもこうして二階^{にがい}の隅^{すみ}っこの、私の部屋^{へや}の窓^{まど}に木の実^みをぶつけて、こっそり呼^よぶのです。

春^{はる}の終わりには、きいちご。

夏^{なつ}の間は、青^{あお}いちじく

いまのは、たぶん、どんぐり。

窓^{まど}を開^{ひら}けたら、やっぱり。

月^{つき}に照^あらされた裏庭^{うらにわ}で、しんちゃんの坊主頭^{ぼうず}が光^{ひかり}っています。私の目^めは、きつとまんまるになっていたでしょう。もう一度、耳^{みみ}を引^ひっぱってみました。痛^{いた}いです。

しんちゃんは前歯^{まへば}の欠^かけた口^{くち}を八^{はち}つ切りすいかのように開^{ひら}けて、にかつと笑^{わら}いました。

「おはよう」

C 念^{ねん}のためにもう一度いいますが、いまは真夜中^{まよなちゆう}です。おはようと言われても困^{こま}ります。

私は唇^{くちびる}に指^{ゆび}をあてて首^{くび}を振^ふりました。家^{いえ}の中はもう寝静^{ねじま}まっていますでしたが、隣^{となり}の部屋^{へや}で寝^ねている母^{はは}は神経質^{しんけいしつ}なたちで、物音^{ものね}や光^{ひかり}にとっても敏感^{びん}な人^{ひと}なのです。私^{わたし}が口^{くち}にする食^たべ物^{もの}や、私の学^{がく}校^{こう}の成^{せい}績^{しつ}や、私^{わたし}がつきあう子^こどもたち^{たち}の素^す性^{じょう}にも。

しんちゃんは両手^{りょうて}をほほにあてて、唇^{くちびる}を「あ・そ・ぼ」というかたちに動^{うご}かしました。

私^{わたし}が「え？」というふう^{ふう}にまた目^めを見開^{ひら}くと、今度^{こんど}は「おりてこいよ」と唇^{くちびる}のかたち^{かたち}だけで言^いい、手招^{てま}きをします。D その様子^{ようす}があんまり普通^{ふつう}だったから、思^{おも}わずこくりとうなずいてしまいました。

急^{いそ}いで着^きがえて、窓^{まど}ぎわまで伸^のびている柿^{かき}の木^きの枝^{えだ}にしがみつきました。おさるのように両手^{りょうて}両足^{りょうそく}で枝^{えだ}にぶらさがって、腰^{こし}を伸^のびちぢみさせると少しずつ前^{まへ}に進^{すす}みます。幹^{かみ}までたどりついたら、あとは枝^{えだ}をつたって下^{くだ}りるだけ。しんちゃんに教^{おし}えてもらったワザです。母^{はは}さんが目を覚^さましませんように。私^{わたし}のこんな姿^{すがた}を見たら、きつと卒倒^{そつとう}してしまう^{してしまう}に違^{ちが}いありません。

「パン・ツー・まる見え」

しんちゃんが手を叩き、指を二本つき立ててから丸をつくり、そして遠くを見るようにおでこに手をあてました。

しんちゃんお得意の、古めかしいギャグです。パンツなんか見てやしないくせに。小学三年生のしんちゃんの目を釘づけにしているのは、私のスカートの中なんかではなく、赤くなりはじめた柿の実のほうに決まっています。

「どうしたの、いったい」

柿の木の下で声をひそめて聞きました。私につられて、しんちゃんもひそひそ声を出しましたが、まるで答えになっていません。

「今日はどこ行く?」

「いまから?」

「うん」

「うんって、もう真夜中だよ」

「そうだ、おたま池のほくらにしよう」

どんぐりみたいな目をくりくりさせて言います。そうです。いつだって、人の言うことなんかまるで聞かない子なのです。

月の光の中で、しんちゃんの自転車がさん然と輝かがやいています。がっしりとした荷台のある黒くて大きな自転車。廃品回収はいひんの仕事をしていて、いつもリヤカーを引いているお父さんのおさがりだと聞きました。サイズは二十六インチ。低学年の子どもたちなら誰もが憧あこがれる大人のかしです。

〈 中 略 〉

月の明るい晩でした。なにしろ三十年も前で、しかも田舎のことですから、外灯などなく、電信柱の上に裸電球はだかが光っているだけの道だけだっただけだ、自転車のライトが消えかかっているのも気にならないほど。灯あかりがないぶん、あの頃の月こころはいまより明るかったのです。私と自転車の影かげが、田んぼ道に黒々と映っていたのを覚えています。

二人でこっそり遊びに行く時には、いつもしんちゃんの自転車の後ろに乗りました。

私が小学三年生になっても、自転車に乗れなかったからです。乗れるようになったのは、みんなしんちゃんのおかげです。

この日がいっだったのか、正確な日づけはいまでも思い出せません。風は少し冷たかったけれど、秋の早いあの地方のことだから、たぶんまだ九月の末だったと思います。

あの地方、なんて私がよそよそしい言い方をするのは、そこで暮らしていたのが、その年の春から秋にかけての半年間だけだったからです。母の生まれ故郷でした。やっかいな小児ぜんそくだった私のために、一時的に転居したのです。二十歳まで生きられるかどうか、お医者さんにそう言われるほどだったとか。

あの頃の私は、毎晩目を閉じる時に、次の朝も目覚めることができるとかどうかさえ不安で、びくびくしながら暮らしていました。それからもう三十年、いまの私は自転車^Eをすいすい。とんだ藪医者^{やぶい}者です。ね。

たぶん本当に悪かったのは、私の体より母と父の関係だったのだと思います。父はその頃、母や私とは別のところで、ほかの女の人と暮らしていました。お医者さんでも治せない重症^{じゅうじょう}。いま思えば、母が私を連れてあの家に戻^{もど}っていたのは、そんな事情もあった気がします。

(荻原浩「しんちゃんの自転車」)

問一 X に体の一部を入れて、言葉を完成させなさい。

問二 Y に入る時間を、午前・午後をはっきりさせて、漢数字で答えなさい。

問三 ——線部A「私はふとんの中で両方の耳を引っぱりました。」とありますが、なぜ「私」は両方の耳をひっぱったのでしょうか。その理由を答えなさい。

問四 ——線部B「八つ切りすいか」について、このすいかが一玉が3kgだとして、八つに切ったとき、一切れは何gか答えなさい。なお、一切れの重さは全て等しいものとします。

問五 ——線部C「念のためにもう一度いいますが」とありますが、この表現にはどのような役割がありますか。その答えとして適切なものを次のア～エの中から一つ選んで答えなさい。

ア 小学三年生の子どもが、木の実をぶつけて呼びに来るのは間違っていることを強調させるため。

イ 小学三年生の子どもが、外に出る時間ではないということを強調させるため。

ウ 小学三年生の子どもが、夢を見ているのではなく、現実であるということを強調させるため。

エ 小学三年生の子どもが、歯医者に行かず、前歯が欠けてしまっているということを強調させるため。